

Notes on F. M. Dostoevsky(7)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 健之介 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/518

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ドストエフスキー・ノート (7)

——転向の足あと——

中村 健之介

(1) 埴谷雄高のドストエフスキー理解——体験というハサミ

埴谷雄高は本多秋五との対談「ロシア文学と私」(昭和三九年、一九六四年)でこう語っている。

「ドストエフスキーの影響が現われたといえるのは、どちらかといえば、社会運動に挫折があったり、変転があったてから後じゃないかと思う。ペトラシエフスキー事件後のドストエフスキーと昭和七、八年後のわれわれがちように嘯みあったという感じだな。……『悪霊』を読むと、身につまされる、というか、感無量になるな。ほくもウォリンスキーの『偉大なる憤怒の書』を訳しながら、……印象的なのは、五人組だったな、いちばんおもしろかったのは。エリケリとか、ヴィルギンスキーとか、リプーチンとか、組織の中でしゃにむに前進しようとしていたり、狐疑逡巡したりするさまは身につまされる感じでおもしろかった。細胞と同じだからね」(『埴谷雄高対話集 架空と現実』)

埴谷雄高は、「意識が即ち存在であるような何処かの世界」へ行きたいと願い、「子供を産む」という「過ち」にだけは寛大になれないと言ってきた人である。身体ある人間の思考が嫌いだ(！)、カントはいいが母親はいや、という人だった。ドストエフスキーについては、埴谷は、ドストエフスキーの『悪鬼ども(悪霊)』の「哲学的自殺者」(?) キリーロフばかりを拡大解釈した。そして、肉なる存在に対する嫌悪と抽象愛好のハサミで、いわば虚空からドストエフスキーのシルエットを切り取るかのようにドストエフスキーを語った。

しかし、ドストエフスキーを切り取る埴谷のハサミが、目立たないが、もう一つあったことが、右の友人本多秋五との対談からわかる。

すなわち左翼運動の体験というハサミである。埴谷は「細胞」[工場などに作られた日本共産党の下部組織]における自分の体験をドストエフスキーの『悪鬼ども』に見出した。自分たちの現実の「挫折」や「変転」を、『悪鬼ども』の登場人物たちの

不安な自己顕示や狐疑逡巡に重ね合わせる事ができた。「こうとか考えられぬこの思考法」が一番いやだと何度も公言している埴谷雄高も、こうだと書かれている作中人物たちに自分を重ね合わせて「身につまされた」。

埴谷雄高は、ソ連旅行でも、自分の肉体によって「ロシア」に近づく体験をしている。レニングラードで埴谷は、うかつにもネワ河に浮かぶ船にカメラを向けたために一人の老人から「スパイ」と疑われた。老人は民警を呼んでこようとする。埴谷は恐怖に襲われ、「どんだん足をはやめ」てその場から逃れる。

だが、ここでも埴谷は、「《民衆》の怖ろしい無言の集合体の顔がこれなのだ、と自身の裡に呟きながら」と、自分勝手な抽象化による弁明を加えないではいられないのだが。（埴谷『姿なき司祭』の「民衆の顔」、昭和四四年）。

私は、美意識のつよい空想的論理の愛好家埴谷雄高のドストエフスキー論には辟易するが、『悪鬼ども』を読んで体験を発見して「身につまされる」という埴谷には、共感する。「こうとか考えられぬこの思考法」が一番嫌いだという埴谷雄高は、決定されることを不快とし「二二ガ四は死のはじまり」という「地下室」の男にも、自分を重ね合わせることができたはずだ。そういう埴谷に私は共感する。

ドストエフスキーに「自意識の魔」を読みとつた小林秀雄も同じだった。『女とボンキン』に現われているように、脈絡なく動く女の感覚とそれに向き合う自分の自意識の格闘を体験し

ている青年小林秀雄は、ドストエフスキーの『地下室の手記』を「身につまされ」ながら読んだに違いない。

人はそれぞれドストエフスキーに生身の自分を発見してきただ。そうでなくてどうして「感無量」になれるだろうか。「意匠」という批評のふくろが目覚めるとしたら、そのあとである。

(2)「転向者」ドストエフスキー

埴谷雄高が体験のハサミで切り取ったドストエフスキーは、「転向者」である。

埴谷は「ペトラシエフスキー事件後のドストエフスキーと昭和七、八年後のわれわれがちょうど噛みあったという感じだな」と言う。非合法活動のゆえに逮捕され「転向」した自分たちと、一八四九年のペトラシエフスキー事件で逮捕され、社会主義運動に挫折し、「信念の甦生」を体験したドストエフスキーとが、「噛み合った」というのである。

自分とドストエフスキーは同じ「転向者」だというドストエフスキー解釈は、次の座談においても見て取れる。

「吉村善夫 ドストエフスキーはそんなに転向にこだわっている

たのでしょいかね。「吉村はキリスト教の立場から、ドストエフスキーは近代ヒューマニズムを批判する「弁証法神学の先駆者」である」と論じた。著書『ドストエフスキー——近代精神克服の記録』がある。」

埴谷雄高 心理的にこだわっていた結果がああいう一つの『地下室の手記』の「ヒステリカル」な調子をうんだのでしょ
うね。

吉村 私などそういうふうには思えないのですがね。まあ、今の
日の転向者みたいなこだわり方をしているとは思えないの
です。

奥野健男 もっとこだわっていたと思いますね。「奥野は、フロ
イトの心理学を借りて太宰治を論じた人。太宰は左翼運動から
外れて罪悪感にとりつかれたという説をとなくて、ドストエフ
スキーも同列だと思っただらいい。」

吉村 あの当時は「十九世紀後半のロシアでは」、今日の「日本の」
ように世間から転向者というふうには指弾されたんですか。

日野啓三 いまよりももっと露骨だったんじゃないでしょう
か。「日野はジャーナリスト、評論家、小説家。」

米川正夫 転向者という言葉はその時分使わないけれども、ド
ストエフスキーは一生「警察の」監視付きでくらしただ
すからね。「米川はロシア文学者。ドストエフスキーをはじめ
とする膨大な量のロシア文学の翻訳をなしたげた。」

吉村 いやその意味じゃなくて、左翼から……。

埴谷 左翼から目のかたきにされましたね、もちろん……。

吉村 批判されたのですか、元の同志から。

埴谷 ええ……。「座談会」ドストエフスキーを語る「昭和三一年、
一九五六年。『埴谷雄高ドストエフスキー全論集』

ドストエフスキーは「転向にこだわっていた」、「左翼から目
のかたきにされていた」「元の同志から批判された」というのは、
本当だろうか。少し考えれば、そんなことがあるだろうかとか
れも疑うのではないだろうか。時代の違いを無視し、歴史も
考え方も違うロシアと日本の知識人を簡単に重ね合わせた暴論
ではないか、といま言うのは容易である。

しかし、そういう重ね合わせが、「昭和三一年」の、左翼運
動や「転向」が重大問題だった時代の日本の知識人たちにとつ
ては「正しい」考え方だったのではないか。「もちろん」「ええ」
と断言する埴谷雄高に、吉村善夫をのぞく全員が迎合の姿勢で
ある。「正しい」にはあらがえない。ロシア文学者米川正夫も
黙している。日本の「転向」の当事者埴谷に、ロシアの「転向」
は少し違うのではないかと見えなかったのだろうか。

問題は、埴谷たちが、ドストエフスキーと「われわれ」は「噛
み合った」と感じたその体験を検証してみようと思わなかった
ということである。そして私たちが、そういう重ね合わせは無
知によるのではないかと気づいていながら、ロシア人ドストエ
フスキーの「転向」はどういう事実であったのか、かれ自身が
「信念の甦生 (перезождение убеждений)」と名づける体験が
何であったのか、いまだにはっきり言うことができないという
ということである。これは、日本人のドストエフスキー理解あ
るいは誤解の重要な問題点の一つだろう。

(3) ペトラシエフスキー事件裁判のドストエフスキー

ドストエフスキーは一八四九年四月、二八歳のとき、ペテルブルグの知識青年の「文学と政治」を語る集まりペトラシエフスキー・サークルにおいて政府批判につながる言論活動を行なったという嫌疑で逮捕された。主たる容疑は国教正教会批判をふくむ批評家ベリンスキーの手紙をサークルの会合で朗読したことだった。逮捕されてから八ヶ月間、ペテルブルグ市内のペトル・パウエル要塞監獄の独房に拘留されて取り調べを受けた。

逮捕前のドストエフスキーは「ヒポコンデリー」を患っており、幻想、幻聴に襲われて苦しんでいた。逮捕後は独房拘禁で体調はさらに悪化した。獄中から兄ミハイルに宛てて書いた手紙には、床が揺れる、神経がおかしくなってきたという恐怖を打ち明けている。それなのに、逆境に立つと精神は毅然とするのだろうか、この取調べ期間の訊問と供述の記録を読むと、獄中のドストエフスキーは「娑婆」のかれからは予想できないねばり腰である。取り調べにあたった予審委員の一人ロストフツェフ将軍はドストエフスキーを「しぶとい男だ」と評しているが、そういう印象を私も受ける。表現の自由を抑える検閲に対して抗議するドストエフスキーは、しぶといばかりか堂々とさえしている。

「わたしが何か語った、いささか不平を言ったにしても（不

平といってもごくわずかなものです）、果してそれが、わたしが自由思想を抱いているということなのでしょうか？（ニコライ一世治世のロシアでは、「自由思想」を抱いていると裁判で判定された人は、「犯罪者」とされた。）しかも、わたしは何に對して不平を言ったか？ 誤解に對してなのです。そうなのです。わたしはどの文学者も初めから疑われている、疑惑と不信の目で見られているということを一所懸命証明しようとしたのです。文学者がそのような破滅的な誤解を自らはらそうと思わぬ点で、当の文学者たちを責めたのです。それは致命的な誤解です。なぜなら文学はそのような窮屈な状況では生存困難だからです。

そのような状況では、実に多くの芸術分野が消滅せざるをえません。風刺文学や悲劇はもはや存在しえません。現在のようなきびしい検閲のもとでは、グリゴエードフやフォンヴィージン（ロシアの諷刺劇作家たち）のような作家、いやプーシキンでさえ存在できません。風刺は悪徳を、とりわけ美德の仮面をかぶった悪徳をあざ笑います。

現在、わずかな嘲笑でも、どうしたら可能なのでしょうか？ 検閲官はあらゆるものに、何かのほめかしを見ようとし、人身攻撃はないか、憤懣はないか、作家はだれかある人物や何かの規則を暗に指しているのではないかと疑っています」（ドストエフスキーの「釈明書」。ベリチコフ編・中村健之介編訳『ドストエフスキー裁判』）

ドストエフスキー自身、後に知人に宛てた手紙で、(ペトラシェフスキー事件裁判の全体を通じての自分の態度を検討してみたが、恥じるところはない。ペトラシェフスキー・サークルの仲間について不利な証言は一切しなかったことを密かに誇りに感じている)と書いている(一八五六年三月二四日、トートレーベン宛の手紙)。かれはむかしの自分を甘く美化しているのではない。いま引用はしないが、「裁判記録」に収められている三六の「公式審問」とそれに対するドストエフスキーの供述を読めば、かれが裁判官の前に友人を守る闘いをしたことは、だれの目にも明らかだろう。ドストエフスキーは、当時自分は「新しいキリスト教としての社会主義」を信じていたと言っているが、その「新しいキリスト教」の中心には、友人との「連帯(ассоциация)」という教えがある。かれは教えを懸命に守った。

右の、壇谷雄高たち座談会の出席者たちの考えているような「転向」(ドストエフスキーの場合は「新しいキリスト教としての社会主義」を放棄すること)は、拘留、裁判の段階では起きていない。

(4) ドストエフスキーの「信念の甦生」

ドストエフスキーは裁判のあと、シベリアのオムスクへ四年間の懲役流刑となるのだが、後にかれ自身がエッセイ「現代の欺瞞の一つ」で書いているところによれば、流刑地で「ナロー

ド(民衆)とのふれあい」によって「信念の甦生」が起きた、という(『作家の日記』一八七三年)。

しかし、この「信念の甦生」は日本の社会主義運動経験者たちの言う「転向」とは違う。

右に書いたように、逮捕される前、ペテルブルグのドストエフスキーは強い厭生感と嫌人感をともなう「神経性の病氣」に苦しんでいた。医者にかかって薬も服用していた。それが、懲役の判決を受けてシベリアへ送られ、毎日労作業に従ううちに、いつの間にか「ヒポコンデリー」が治ってきた。そして、「奇跡か何かのように自分の心にあつた一切の憎悪の感情と毒々しい気持ち」が跡形もなく消えて、「同房の囚人達を「それまでとはまったく違った目で」見るようになり、平民出の囚人にこちらから話しかけたりするようになった(一八七六年のエッセイ「百姓マレー」も参照のこと)。

その自分の生存感覚の変化を、ドストエフスキーは「民衆との直接のふれあい」による「信念の甦生」と言っているのである。これは「新しいキリスト教としての社会主義」の放棄ではなく、むしろその教えに適った受身の体験で、人々との共生和解感の再生、病氣からの回復感、一種の蘇生体験だった(中村健之介『ドストエフスキー・生と死の感覚』参照)。

「信念の甦生」は「信念(複数)」の「よみがえり」「復活」「再生」と訳されてもよい。

だから、ドストエフスキーは自分の出獄を「死者たちの間

からの復活 (Воскресение из мертвых)」（『死の家の記録』の最後）と書いた。またラスコーリニコフがこれから「復活」していくことを、「一人の人間が徐々に生まれ変わっていく物語、かれが徐々に一つの世界からもう一つの世界へ移って行く物語 (история постепенного перерождения его, постепенного перехода из одного мира в другой)」（『罪と罰』の最後）と書いた。ドストエフスキー自身が、徐々に元気になり、「死せる生」から「生ける生」へ移っていったのである。

出獄後のドストエフスキーはセミパラチンスクの町で、アルコール中毒の夫をかかえて苦労している人妻マリヤ・イサーエワに出会う。そしてマリヤを「おさな子のようなやさしい心根の妹」に見立てて、マリヤを「救う」ための恋愛に飛び込んでいく。それは、ドストエフスキー自身の解釈では、兄妹愛の実践、まさに「新しいキリスト教としての社会主義」の教えの実践だった。その恋愛事件で、ドストエフスキーはライヴァルである二四歳の教師ヴェルグーノフの就職のために心遣いをしている。それも「新しいキリスト教」が教える「友愛」である（中村健之介「マリヤ・ドミートリエヴナ——不幸と愛」参照）。もう何度か書いたことだが、ドストエフスキーの小説のコアは、そういう美しい兄妹愛にあこがれる孤立者たちの、「わたしを認めてください」とせがむ「死産児 (мертвоорожденный)」や「できそこない (урод)」たちの、告白である（後注参照）。ドストエフスキーは、「虫けらにさえなれなかった」無能な小

役人が主人公の『地下室の手記』と寝取られ亭主が主人公の『永遠の亭主』は、「本質は同じものです。それは、わたしが常に取り扱ってきた内容です」（ストラフホフ宛の手紙、1869.3.30）と言っている。そのとおりなのである。日本の作家では、川端康成と北条民雄がそのことをよく知っていた。

読者はそれぞれドストエフスキーに自分を発見して「身につまされる」のであるが、では、それぞれの自分だけでいいのだろうか。「地下室の男」が一体どういう人物なのか、ドストエフスキー自身はどういう人間に興味があつて、書こうとしたのか、作家ドストエフスキーのテーマが何であるのか、そして世界を、宇宙をどのように感じていたのか、そういう基本的な事実をとらえることは、興味深いし、「理解」ということを言うのなら）必要なのではないのだろうか。「作家理解は読者の自由だ。誤解も正解だ」というのは、ドストエフスキーという相手がいるのだから、勝手すぎるのではないだろうか。

ドストエフスキーたちの「新しいキリスト教」は、地上のあらゆる人がキリストの教えに従って「互いに兄弟のように」なるだろう、やがて「友愛社会」、「地上の天国」が生まれるだろうという、半分宗教的なヴィジョンである。

たしかにペトラシエフスキー・サークルの青年たちは検閲廃止を希望したし、農奴解放をめぐる議論はしていた。ソ連のドストエフスキー研究者たちはその面を強調し、ドストエフス

キーを「革命的民主主義者」として前へ押し出した（たとえばペリチコフ「ドストエフスキーとペトラシエフツィ」中村健之介訳）。

しかし、ドストエフスキーは、国教ロシア正教会を批判する「自由思想家」であり、同時に、「良き牧者」である皇帝を待望する帝政支持者でもあった。そして、ここが大事な点だが、ペトラシエフスキー・サークルの青年たちの書いたものを読めば、かれらが、現体制を批判しながら、同時に、「地上の天国」「黄金時代」という大いなる理想は、自分たち地上の人間の努力によつて実現されるのではない、と考えていたことを認めないわけにはいかない（シチョーゴレフ編『ペトラシエフツィ——資料集』、コマローヴィチ『ドストエフスキーの青春』、ジヨナサン・セドン『ペトラシエフツィ——一八四八年のロシアの革命家たち』、B・エゴロフ『ペトラシエフツィ』）。

ロシアの青年たちは、理想郷建設の努力はしなくてもいいのだと思っていた。「新しいエルサレム」は、いわば「時満ちて」地上に出現すると思っていた。

「すばらしい時代が来る 流血の戦いは終わり 耕された畑に秋の稔りはいよいよ豊かとなり やせた土地には美しい館が一面に建ちならぶだろう・・・人間にとつても、いまとは別の生がはじまる その生は生けるハーモニーに満ちあふれる そのとき、人間も自然も変容する」（ペトラシエフスキー・サークルの一人、アフシャルーモフの詩。前掲『ドストエフスキー裁判』参照）

ドストエフスキーに比べればはるかに実証主義に近かった批評家サルティコフ・シチエドリんでさえこう語っている。

「サン・シモン、カベール、ルイ・ブラン、とりわけジュールジュ・サンド、この人たちのフランスからわれわれにむかって、人類への信仰のことが響きわたってきた。（黄金時代）は過去にではなく、われわれの前方に存在するのだという信念の光が、そのフランスから発してわれわれの前に輝きそめたのだった」（シチエドリン『外国で』。中村健之介「ペトラシエフスキー・サークルの青年たち」参照）

ドストエフスキーたち、一八四〇年代のペテルブルグの知識青年たちが信じ心酔した「新しいキリスト教としての社会主義」は、美しく広大な田園風景にも似た、新しい「千年王国」^{ミレニアム}の期待と予感だった（不思議なことに、「想起」でもあった）。かれらの世界観においては、ファンタジーとリアリズムが、宗教と実証主義が、分化しておらず、並存し、ときには密着する。ひとことでは、知性はまだ世俗化されてはいなかった。

その「新しいキリスト教としての社会主義」は、処女作『貧しい人たち』の金色に輝く農村から、最後の重要な著作である『プーシキン 講演記録』の「人類の兄弟的一体化」まで、ドストエフスキーの全生涯、全作品を貫く世界観である。

そういう新しい「千年王国」という完全幸福の世界観にとりつかれた「夢想家」は、必ずしも弱くはない。『貧しい人たち』のワルワラーが示しているように、完全幸福を未来に予感する

だけでなく、過去にそれが実在したとまざまざと感じるから、見たこともないのにそれを鮮明に想起しているから、不安にならないのである。恐れなければならぬのは、「死せる生」や「ネワの幻」のような冷暗の気分の襲来である。強烈な鬱の気分は、「黄金時代」の想起を不可能にする（中村健之介「黄金時代」の夢——楽園の生を支える気分」参照）。

シベリアでのヒポコンデリーの治療、「厭生感」の霧消、よろこばしい共生感の発生は、ドストエフスキーに、お前はまだまだ新しいキリスト教」の大なる理想につながっているのだとささやいた。それが「信念の甦生」だった。「兄弟愛」の体感がふたたび生まれた。自分に鉄球の足枷をつけてシベリア流刑に処した者たちに対する恨みも、同僚の囚人たちに対する「憎悪の感情」も、消えた。ドストエフスキーはシベリアにおいて自分はそういう意味で「復活」したと感じていた。

シベリア流刑の前、ペトル・パウエル監獄の独房の八ヶ月間、ドストエフスキーは文字通り「よい夢」によって支えられて生きた（ドストエフスキー『幼いヒーロー』参照）。裁判でドストエフスキーは銃殺刑の判決を受けたが、かれがその「模擬」銃殺刑を前にして恐怖を感じないでいられたのも、われわれは「キリストのもとへ行くのだ」という、光源へ向かう強い予感があったからである。流刑後も、オムスク監獄で、一般徒刑囚たちの「抗議」の列に、元貴族囚人のなかでただ一人加わったのも、「みんな兄弟」という麗しい幸福のヴィジョンに誘われたからだっ

た（ドストエフスキー『白痴』、『死の家の記録』参照）。

ドストエフスキーは生涯そのような「社会主義者」であり続けた。「転向」はしていない。

ドストエフスキーについて「転向」らしきことがロシアの同時代の知識人の間で言われるようになるのは、一八七〇年代、ドストエフスキーが保守の親玉カトコフなどと手を組んで小説を書くようになってからである。どのグループと組むか、それがかれらの間では重大問題だった。なお、カトコフは宣教師「日本のニコライ」をも支援した。

ドストエフスキーの「ユートピア思想」は、十九世紀後半から二十世紀に社会運動・思想の大きな潮流となるヨーロッパの社会主義と重なり合うわけではない。ヨーロッパの社会主義も「ユートピア」をめざすのかもしれないが、その「ユートピア」は、啓蒙主義的な計画と管理と努力によって実現される理想社会である。

「西欧のユートピアとはなによりも無為とは対極にある概念で、細部から全体にわたって綿密に計算され、全体がひとつの機械のように作動するように組織された人間共同体で、その組織員はそれぞれの構成役割によって、全体の目標と方途にあわせてみずからの任務を果たしていく義務を負う。・・・ユートピアとはわれわれ東洋人的な感覚にはかなり息苦しく、窮屈な世界で、まさしく生き苦しい社会である」（松宮秀治『芸術崇拜

の思想」。

ロシア人ドストエフスキーもその「生き苦しさ」を鋭く感じとっていた。

ドストエフスキーたち、一八四〇年代のロシアの知識青年たちが崇拜したフランスの「偉大な学者」は、シャルル・フーリエである。かれらの「フーリエ」学は、ドストエフスキーの友人アポロン・マイコフが言うように「ほとんどが耳学問」(前掲『ドストエフスキー裁判』²²⁷)ではあったが、それでもフーリエの友愛的宇宙のヴィジョンには深く魅了された。ドストエフスキーの『女あるじ』(一八四七年)は、当時のロシアの青年たちにとってフーリエの「学問」が、いわば、とらえどころがないのに素晴らしいと感じられる真理のようなものであったことを伝えている。ドストエフスキーは、フーリエの「学問」の真理とは、「新たな明朗なかたちをした理念の、何かしら感嘆せずにはいられない喜ばしい姿」なのだと言っている。『女あるじ』の主人公オルディノフは「その学問に対する情熱」のゆえに役所勤めを辞めたのである(中村健之介『女あるじ』小説論)。「ドストエフスキー・作家の誕生」⁷⁵。なおフーリエ『四運動の理論』(巖谷国士訳も参照)。

ドストエフスキーたちを魅了した「真理」は社会組織化が可能な真理ではない。そして、フーリエの提示した社会組織のモデル、すなわち共同体「ファランステール」に対しては、ドストエフスキーやマイコフたちは一貫して強い嫌悪を示している

(『ドストエフスキー裁判』「記録13」参照)。かれによれば、計画と相互監視によって運営される共同体「ファランステール」は、「新しいキリスト教としての社会主義」とは峻別されるべき「政治的社会主義」の産物であり、実はアンチ・ユートピアなのである。そういう「強制的コミュニズム」に対する反感、嫌悪は、ドストエフスキーの生涯にわたって見られる。『罪と罰』や『未成年』の主人公たちは、そういう西欧型「理想社会」のために「レングを積む」のはいやだと言っている。西欧型近代的市民社会もいやなのである(ドストエフスキー「現代の欺瞞の一つ」。コマローヴィチ著・中村健之介訳『ドストエフスキーの青春』、中村健之介「黄金時代の夢」、『ドストエフスキーとマルクス』参照)。

(5) 一八六〇年代のドストエフスキー

ドストエフスキーは四年間の懲役とその後の軍隊勤務を果たし、一八五九年末、一〇年ぶりに首都ペテルブルグへもどってきた。

右の埴谷雄高たちの座談会の出席者たちは、吉村と米川以外は、ペテルブルグへもどって文学活動を再開した一八六〇年代のドストエフスキーは、自分の「転向」にこだわっており(埴谷たちは一八六四年の『地下室の手記』を、そのこだわりの表れと解釈している)、その「転向者」ドストエフスキーに対して、「左翼」の白眼視や元の同志たちからの批判があった、と想像している。

前に言ったように、その想像は当たってない。

一八六〇年代、雑誌『時代(ヴレーミヤ)』を編集したドストエフスキーは、同時代の「左翼」の『現代人(ソヴレメンニク)』誌の批評家たちとさかんに論争している。主たる論争相手は当時の「カリスマ」評論家チエルヌイシエフスキーであり、その後を継いだアントノヴィチである(二人とも聖職者の子で、元神学生の「インテリゲンツィヤ」)。反政府の旗幟を鮮明にしていた『現代人』から見ると、『時代』は「八方美人」で「敵味方の別なく、どちらにもぺこぺこしている」(アントノヴィチ「雑誌総覧」雑誌だった。『時代』の評論は、購読者確保をねらって総花式の論評態度だった。諷刺作家サルティコフシチェドリンは「『時代』さん、だれもあなたを迫害しちやいませんよ」(サルティコフ「『時代』の不安」とドストエフスキーを皮肉った。)

こうした揶揄や小競り合いは、当時のロシアの首都のせまい知識人の世界をよく映し出している。しかし、ドストエフスキーが力を入れた「左翼」との論争の核心を見逃してはならない。それは、「人が理性的に自己の利益を追求すれば社会全体がよくなる」という考えは正しいか、すなわち「理性的エゴイズム」という考えは正しいか、という問いである。言い換えれば、宗教は不要かという問いである。

『現代人』派は「理性的エゴイズム」こそ正しいと主張した。かれらは基本的に性善説と実証主義の信奉者だった。そして、〈さまざまな障害をのりえながら人類も国民も進歩する。宗教

をはじめとする旧弊は改められねばならない。これから社会を動かすのは貴族、地主、聖職者ではなく、啓蒙された平民でなければならぬ。その新しい主導者たちに、科学がすばらしい未来を約束している〉という考えだった。

チエルヌイシエフスキーはドストエフスキーより七歳下である。ドストエフスキーとほとんど同じ思想遍歴(ジョルジュ・サンド、フリーエ、ドイツ観念論など)を経てきており、ペトラシエフスキー・サークルにも関係があったのだが、しかし、宗教的梦想とは縁を切り、イギリスのベンサム、ミルなどの功利主義を吸収し、理性的存在としての人間を信じる立場に立っただけだった。

チエルヌイシエフスキーとその仲間には、人間の行動の最大のモチヴェーションはわがためを図ることであり、知性の発達した個人の「わが利」は、せまい利己主義ではなく、善なる利であるから、その追求は必然的に社会の利益と合致する。また、人間の本質は善であるから悪しき行為は社会的環境の結果だ。社会的環境をよくすれば悪はなくなる〉と説いた。チエルヌイシエフスキーの「理性的エゴイズム」とは、「個人と社会の幸福が調和する、来たるべき秩序」をめざす「啓蒙された利己主義」であり、「(理性的エゴイズム)の理論のかけには社会的義務と真の利他主義の深い感情が潜んでいる」という研究者もいる(大竹由利子「チエルヌイシエフスキーとミハイロフ——両者の女性観」。『スラヴ研究』第三六号)。

ドストエフスキの『時代』派もすばらしい未来を望み見るのであるが、ドストエフスキーは依然として「新しいキリスト教」から離れていない。かれらは現実の生活をはるかに超える理想世界までも夢見ていた。〈貧困をなくすることが人類の理想ではない。人類はそれ以上の理想を、友愛社会を、あらゆる民族、あらゆる文明の統合を、「新しいエルサレム」を、待っているのだ〉という考えである。

ドストエフスキーたちによれば、〈『現代人』派の考えはヨーロッパからの受け売りだが、現実のヨーロッパはその考えに従った結果、ブルジョアの支配する、エゴイスティックな個人主義のはびこる社会となってしまった。それは友愛の墓場と化してしまった〉というのである（ドストエフスキー『夏の印象をめぐる冬の随想』一八六三年）。

ロシアはヨーロッパの「市民社会」を乗り越えて、全人類が互い助け合う友愛の世界を待つべきなのだ、というのが『時代』派の反論だった。「ドストエフスキー・ノート 5」でも書いたように、前近代のロシアが近代のヨーロッパを超える夢を持ったのである。

十九世紀後半のロシアの現実の民度がどれほどのものであったかは、たとえば宣教師ニコライの日記を読めばわかる。ニコライは幕末の函館へ来て、「巡回訪問する貸本屋」の存在におどろき、道で若い娘たちが書物を見せ合って話している光景を見て、「目を疑った」とさえ書いている。ロシアでは夢にも考

えられない光景だった。ロシアの農村は文盲の乞食であふれていた（ニコライ『ニコライの見た幕末日本』、『宣教師ニコライの全日記』1862-1863その他。また久米邦武『米欧回覧実記』第四編第六十一巻も参照。久米はロシアの農村の印象を「太古の世界ナリ」と言っている。ロシアにはロシアなりの文化があるのであるが、「近代ヨーロッパ」を基準にすればこうなる。）。もちろんヨーロッパの「ブルジョア社会」も、ロシアでは、それを真似ることは無理な相談だった。ドストエフスキーたちのユートピア願望は、弥勒の世を待つかたちとならざるをえなかった。

そして、ドストエフスキーは、〈人はなにごとも理性的に自己の利益となるように選択し行動すべきだ〉と説く功利主義的合理主義者の自信に、圧迫を感じていた。『現代人』派が人間は本来善なる理性的存在であると思っていること自体に、ドストエフスキーは不快を覚えただろう。『現代人』派の考えには病者や劣等者への親近感が欠けている。「より善いものに気づきながら、それに達し得ないできそこない」こそ、「われわれ現代ロシア人」（「ノート」一八七五年）なのだというのが、ドストエフスキーの実感であり見方だった。

埴谷雄高たちは、ドストエフスキーの『地下室の手記』の主人公の「ヒステリカルな調子」の語り口は「転向者」のうしろめたさの表れだと解釈したが、それはちがう。前にも言ったように、『地下室の手記』（一八六四年）は、われわれは「できそこない」だ、「病人」だ、「死産児」だという主張なのである。

それが、例のごとく、卑屈な媚びた調子でなされている（中村健之介「地下室の男——現代ロシア人の代表」参照）。

その頃のドストエフスキーの作品や手紙、あるいは同時代人の回想録や批評をいろいろ読んでみても、ドストエフスキーが「転向」にこだわっていたとか、「転向者」ドストエフスキーに對する白眼視があったとかいう記事はどこにも見当たらない。「万年女学生」アポリナリーヤ・スースロワがドストエフスキーに近づいたのは、ドストエフスキーが、「虐げられた人たち」の味方であったがために「過酷な処罰を受けた」闘士であり、いまも「その栄光につつまれていた」からなのである（ドリーニン編、中村健之介訳『ドストエフスキーの恋人スースロワの日記』参照）。

右の埴谷たちの座談会では、ドストエフスキーはペトラシエフスキー・サークルの「元の同志」から批判されたと言われているが、これもあやしい。仲間だったダニレフスキー、パーヴェル・フィリーポフ、プレシチエーエフなどについて、なつかしがつたり、ほめたり、彼らの親切に感謝したりしているドストエフスキーの手紙はあるが、彼らから批判されたという記事は見当たらない。一八七二年になっても、かつてペトラシエフスキー・サークルの仲間だったモンベリから「会いたい」という手紙（一八七二年一〇月二〇日）がきたりしているのである（ヤクボーヴィチ他編『ドストエフスキー年譜——その生涯と作品』第二卷参照）。

もつとも、美しい友愛社会を夢見る男が、現実生活においても、美しい夢にふさわしい生活態度や女性関係を保っていたかという点、そうではない。ドストエフスキーと若いアポリナリーヤとの関係が何であったかは、彼女の日記と手紙があらわに示している（前掲『ドストエフスキーの恋人スースロワの日記』）。女性は男の鬱をとりのぞいてくれる。「この、女に溺れるというところの中にこそ、少なくとも、何か恒常的なもの、自然に根ざしていて幻想に襲われることのないものがある」と『罪と罰』のスヴィドリガイロフが告白している（中村健之介「罪と罰」の自然感」参照）。

『時代』の同人・批評家ストラーホフも、一八六〇年代のドストエフスキーが一八四〇年代と変わらぬ「博愛主義者」であったことを証言しているが、同時にこうも書いている。

「その（ドストエフスキーを中心とする『時代』派の）気風の根にあったのは、いうまでもなく、美しい感情、博愛、苦しい境涯におちいった人々に対する寛容などであった。

しかし、そこにはわたしを驚かしたもう一つの面があって、それはいま言ったことと大きく食い違うものだった。わたしは驚いて見ていただけだが、そのサークルでは、肉体的放縦や正常な慣習からの逸脱は、どのようなものであっても、まったく問題にされなかつたのである。精神の醜悪は繊細かつ厳正に裁かれた。しかし肉欲の醜悪はなんとも思われなかつた」（ストラーホフ『ドストエフスキーの思い出』）。

明治初期の日本の自由民権運動家の男たちのように、ドストエフスキーたちも、博愛の理想を説きながら遊郭にあがるようなこともあったのだろうか。『地下室の手記』はその気配が濃厚である。かれらの「偉大な教師」フリーエは「小規模の連合体」は解消すべきだと教えており、ドストエフスキーも、一夫一婦制は「ヒューマニズムからの最大の逸脱であり、一組の男女をみんなから孤立させることである」と考えていた。かれらの「博愛」にはそういう面もあった（中村健之介『未刊だったドストエフスキー』から参照）。

十九世紀後半のロシア知識人の理想社会のイメージが、右派も左派も、例外なく「相互扶助社会」であったことは、中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』第一巻註解No.126「マルサス嫌い」にくわしく書いた。

ロシア革命時に、「コミユニズム」が人類和合をめざすすばらしい理念であるかのように思われ、その理念が多くのロシアの知識人に受け入れられたのは、かれらが十九世紀の先輩たちの「相互扶助社会」という理想イメージを受け継いでいたからだろう。それがすでに共有されていたから、ブルガーコフもベルチャーエフも、「コミユニスト」になった。

(6) チェルヌイシエフスキーとドストエフスキー

昭和の日本の「筋金入り」の左翼は、当時の日本共産党の幹

部の名前を出すまでもなく、「転向者」をよしとはしなかった。「転向者」の側にいる右の座談会の人たちも、「転向」はうしろめたいことだと思っている。かれらはドストエフスキーを「転向者」と解釈したから、ドストエフスキーは「左翼」から白眼視されただろうと想像した。一八六〇年代ロシアの「左翼」のオピニオンリーダーは『現代人』派の評論家チェルヌイシエフスキーである。チェルヌイシエフスキーたちロシアの「左翼」も、「転向者」ドストエフスキーを白眼視していただろうと想像したのである。

実際はどうであったのか。

一八六二年五月末、ペテルブルグに大火があった。火事の直後、ドストエフスキーは自宅玄関先に「若きロシア」と名乗る過激派青年たちの政治宣伝ビラが置かれているのに気づいた。そして、それを読んで、興奮してチェルヌイシエフスキーを訪ねた。

過激派青年たちのこういう「へたくそなやり口」に居ても立つてもいられない気持になって、青年たちに絶大な影響力をもっているチェルヌイシエフスキーに会って、こういうへたなプロパガンダはやめるよう説得してもらいたいと頼んだ、とドストエフスキーは後にエッセイ「個人的なこと」（一八七三年）に書いている。ひとはチェルヌイシエフスキーのことを無愛想な人だというけれど、自分は会ってみて、物腰のやわらかな落ち着いた人だと思った、とも書いている。

チエルヌイシエフスキーはどう言っているだろうか。一八八八年、つまりドストエフスキーの死後七年目に、流刑地アストラハンでチエルヌイシエフスキーは「ドストエフスキーと会ったときのこと」という文章を書いた。少し長いが紹介してみる。

「トルクーチー市場を総なめにした火事（一八六二年五月の大火）のあった数日後、下男が、F・M・ドストエフスキーの名刺をもってきて、このお客様がお目にかかりたいと申し立てられますと言った。わたしはすぐ客間へ行った。

そこにいたのは、背格好はふつうあるいはそれより少し低いくらいの人だった。その顔は写真でわたしもだいたい知っていた。わたしは近づいて、どうぞソファにおかけください、『貧しい人たち』の著者にお目にかかるのはたいへんうれしいことです、と言いながら、自分もかたわらに腰をおろした。

かれは数秒間ためらうようにしていたが、わたしの挨拶に対し、何の前置きもなしに直接、短く、単刀直入に、自分の訪問の目的を説明して、およそ次のように言った。

（ぼくは重大な要件でぜひお願いしたいことがあって伺ったのです。あなたはトルクーチー市場を焼き払った連中をよく知っておいでだし、かれらに対して影響力をもっておられる。お願いです、今度かれらがやったようなことがくり返されないように、かれらを抑えてください）

わたしは、ドストエフスキーは神経がおかしくなっていて、知能障害に近い混乱状態におちいるのだという話は聞いていたが、かれの病勢がこれほど進んでいて、わたしについての考えがトルクーチー市場放火事件をめぐる想像と結びついてしまうほどにまでなっていくとは、予想していなかった。この憐れむべき病人の神経障害が、医者ならば不幸な病人との言い争いは一切禁じて、（相手を安心させるために必要なことは何でも言ってみよう）と指示する、そのような状態であることを、わたしは見とった。

それでわたしはこう答えてやった、（わかりました、フョードル・ミハイロヴィチ、ご希望のとおりにいたします）

かれはわたしの手をとると、あらん限りの力をこめて握りしめ、うれしさで興奮のあまり声をあえがせ、有頂天になって、感謝を表明した。わたしが、ドストエフスキーに対する敬意によって、灰燼に帰すべき運命にあったペテルブルグを救ってくれたことに感謝する、というのである。

数分して、この感情の昂揚がわが客人の神経に疲労を与え神経を落ち着かせてくれるのを見て、わたしは、こういう場合に医者がどうせよと奨めているように、とっさに思いついたことなかで相手の病的な関心の対象とは無関係で、しかも興味をひくことについて、かれに質問を出してみた。すなわち、かれが発行している雑誌の経理状態はどうであるか、赤字ではないのか、お兄さん（ドストエフスキーの兄ミハイルは『時代』の発

行者だった」の心労の種である雑誌の負債は、返してゆく当てはあるのか、雑誌をやってゆくことであなたとお兄さんは食べてゆく見込みはあるのか、そういったことを訊ねてみたのである。

するとドストエフスキーは、最初の関心事は忘れて、与えられたテーマについて答えはじめた。わたしは、かれが雑誌の仕事について語るのをさえぎったりはせず、すきなだけ話させておいた。かれは二時間ちかくも話していた。わたしはほとんど聞いていなかったが、聞いているふりはしていた。

しゃべり疲れてかれは、自分が長居していることに気づいて、時計をとりだし、校正刷りを読む約束の時間におくれてしまった、それにどうもすっかりお邪魔してしまったようだ、と言って立ち上がり、帰りのあいさつを述べた。わたしはかれを玄関まで送りながら、邪魔なんぞではない、たしかにわたしはいつも仕事でいそがしいが、仕事は一時間だろうと二時間だろうと先へのばす余裕は常にもっている、と答えた」(ドリーニン編『同時代人の回想によるドストエフスキー』第一巻。なお、V・N・シヤガーノフが流刑中のチェルヌイシエフスキーから直接聞いた話として書いているところでは、この場面のドストエフスキーはもっと興奮していた。『ドストエフスキー 新資料と研究』39)

もちろん、右のチェルヌイシエフスキーの「ドストエフスキーと会ったときのこと」には、すでにドストエフスキーが亡くなって七年経っていたにもかかわらず、明らかにドストエフスキー

に対する対抗心が感じられる。

しかし、一八六〇年代、論争していた『現代人』派と『時代』派のリーダーは、互いに口もきかないという関係ではなかった。チェルヌイシエフスキーはドストエフスキーを「転向者」と見て軽蔑していたわけではない。『貧しい人たち』の作者ドストエフスキーは依然「左翼」から尊敬されていた。

また、チェルヌイシエフスキーはドストエフスキーを訪ねて、作品(『死の家の記録』の一部分)掲載の許可を求めたりもしている(チェルヌイシエフスキー「ドストエフスキーと会ったときのこと」)。ドストエフスキーにとっても、チェルヌイシエフスキーはいざとなれば訪ねて行って意見を言うことのできる相手だった。二人は、一八六二年三月、ペテルブルグで開かれた「文学の夕べ」にも一緒に出演している。

(7)「病的な関心」に駆りたてられる人

チェルヌイシエフスキーは、ドストエフスキーが見当外れの想像にとりつかれて突然訪ねてきたのだということ、かれが何かに対する「病的な関心」にとりつかれて苦しんでいたこと、自分の気持をうち明けられる相手が見つかること「うれしきで興奮のあまり声をあえがせて」感謝した、と言っている。チェルヌイシエフスキーはカウンセラーの位置に立ち、「病人ドストエフスキー」のイメージを強く押し出している。

「ドストエフスキーは神経がおかしくなっていて、知能障害

に近い混乱状態におちいるのだという話は聞いていた」というチエルヌイシエフスキーのことばは、根も葉もないつくりごとではない。ドストエフスキーがあらぬ想像や幻想によって狂ったようになること、「その時その時の束の間の幻想によって、要求をむきだしにあらわにして人を悩ます」人であり、「妄想」に駆られて人を訪ねる人であったことは、友人ネクラフソフも、親友アポロン・マイコフも、ドストエフスキーを直接知っていた知的な女性シタケンシネイデルも、実際に訪ねて来られて被害を受けたツルゲーネフも、みな言っていることである。

もちろんドストエフスキーそのことを自覚しており、「わたしは病的な性格だ」（マイコフ宛の手紙、1867&16）と認めている。狂気の接近もよく知っていた。「発狂寸前にまでなったことが何度もありました」（同前、マイコフ宛の手紙）。ドストエフスキーの妻アンナは、秘かにつけていた速記による日記に、夫が発狂の接近におびえていたことを書き記している（中村健之介「ゴリヤートキンとドストエフスキー」、「アンナの速記日記」）。

ドストエフスキーが自分を中心とする「病的な人間（Большой человек）」たちをいかに鋭くとらえ、精確に表現しているか、かれの小説を読む者はそれに驚嘆する。病院の構内で育ったドストエフスキーにとって病人は身近な人間だった。そして自分も「病的性格」だった。病んだ人間の理解と表現こそ、ドストエフスキーの体験であり、才能であり、創作の源泉である。フォークナーは「人間理解〔病的性格の理解〕において、

共感能力において、ドストエフスキーは、芸術家ならだれもが、でき得ることなら、自分と比べてみたいと思う、そういう作家の一人である」と言っている（ネチャーエワ編・中村健之介訳『ドストエフスキー 写真と記録』の中に引用による。また、中村健之介『永遠のドストエフスキー——病いという才能』。フォークナーもまた病んだ者や劣弱なる者たちに近づく。『サンクチュアリ』のポパイは、フォークナーのスメルヂャコフである。

ドストエフスキーは傍観者あるいは観察者ではない。はげしい想像あるいは神経の共鳴によって対象と合体する。自分が何かの事件の「当事者」であるかのように思ってそれに参加してしまう。かれはそういう特徴のある「病人」だった。ドストエフスキーと一緒に雑誌作りの仕事をし旅行もして「被害」も受けたストラフホフはこう言っている。「わたしは観察者だが、あなたは活動家だ、ドラマの参加者だ」（ストラフホフ「観察——ドストエフスキーに」）。

ドストエフスキーを「参加者」に変える電波は、大きく分ければおそらく数種類のものだろう。かれの共鳴を引き起こす最強の電波は被虐のイメージである。それについては、『永遠のドストエフスキー』第三章「犠牲者のいる光景」にくわしく書いた。白く輝くキリスト像やわらかな夕日の光も、合体を誘う電波だった。

知識青年のかかわった事件も、ドストエフスキーを興奮させる電波の一つだった。かれは、ザイチネフスキーなど「若き口

シア」の過激派青年たちについての想像に突き動かされてチェルヌイシエフスキーを訪ねた。『悪鬼ども』のネチャーエフ事件、『未成年』のドルグーシン事件、あるいはデモ中に町の商店主たちに襲われた大学生たちの事件からもわかるように、知識青年たちのかかわった事件は、必ずといっていいほどドストエフスキーの想像を強く刺激し、かれは想像のなかで青年たちと一体化する（一八七八年四月一八日の、ドストエフスキーのモスクワ大学の学生たち宛の手紙参照）。

(8) チェルヌイシエフスキーはいつも冷静だったのか

革命派青年ザイチネフスキーの檄文「若きロシア」は「斧をとれ！」と呼びかけていた。そのビラがペテルブルグのあちこちの家の玄関先に配られたのは、一八六二年五月一四日であった。そして一五日の深夜にトルクーチー市場の火事が起こり、それから二週間にわたって火は燃え広がった。（この檄文とペテルブルグの大火はやがてドストエフスキーの小説『悪鬼ども』の材料となる。）ペテルブルグの住民も新聞雑誌も、檄文と火事を結びつけた。うわさは広がり、革命派青年たちに対する非難の声は高まった。

ドストエフスキーを実質的編集長とする『時代』編集部も、すぐさまこの事件を批評する論文を用意した。論文はゲラに組まれいつでも発表される状態になっていた。ところが、検閲におさえられ、皇帝アレクサンドル二世が自らそれに目を通し、

論文の内容は一般には知られないまま、発表禁止となつてしまった。そしてそのあと『時代』は八ヶ月にわたる発行停止処分を受けた。

なぜか。

それから一一〇年後の一九七三年、『ドストエフスキー新資料と研究』（『文学遺産』シリーズ第八六巻）に、その論文の全文が初めて掲載された（ニコライ・ローゼンブリューム「一八六二年のペテルブルグの火事とドストエフスキー——検閲によつて発表を禁じられた、『時代』の論文二編」）。

読んでみると、首都のほとんどの新聞雑誌が「火事は過激派学生の放火だ」としていたのに、意外なことに、ドストエフスキーたちは、その一般の論調につよく反対しているのである。これは、右も左もだれもが火事を過激派と結びつけたその状況のなかで、注目すべき少数派の主張だった。ドストエフスキーたち『時代』編集部は、世論と当局にむかってこう主張したのだった。抜粋して紹介する。

「檄文（若きロシア）をつくったような連中ならどんなことでもやりかねない。連中は手段を選ばない。あの一連の火事はかれらの活動の手始めなのだ。——そう人々は言っている。

仮にそうだとしてみよう。そうだと仮定した場合には、あの連中は釘を一面に埋め込んだ鉄の手ぶくろで自分の友人の頭をなでようとする人間だ、ということになってしまう。

しかし、そもそも、火事を起こした者たちが〈若きロシア〉と関係があるというのは、はっきり証明されたことなのか。

檄文〈若きロシア〉が学生たちによって作られたと証言する人たちが見つかった、ということを否定しようというのではない。しかし、学生たちがこの事件「火事」と実際につながりがあると証明する事実は、いったいどこに存在しているのか。

これら一連の火災が政治運動と何らかのつながりがあるという見解を、われわれは断固斥けるものである」（『ドストエフスキー 新資料と研究』16）

検閲官が待ったをかけたのは当然だった。「若きロシア」を援護する論文だったのだ。この論文の論調は、ドストエフスキーのネチャーエフ・サークルを弁護するエッセイ「現代の欺瞞の一つ」（一八七三年）とよく似ている。

この「若きロシア」援護の論文がドストエフスキーのチェルヌイシェフスキー訪問の直前に書かれたものであることはわかっている。ドストエフスキーが一人でこの論文を書いたのか、編集部員数人で書き上げたのかは確認できないが、かれが執筆の中心にいたことは間違いない。だとすれば、ドストエフスキーがチェルヌイシェフスキーに頼みに行ったのは、かれ自身がエッセイ「個人的なこと」で書いているように、檄文に関わることだったのではないか。「あなたはトルクーチャー市場を焼き払った連中をよく知っておいでだ。今度かれらがやったよ

うなこと（「うわさでは放火」）がくり返されないように、かれらを抑えてください」とは言わなかったのではないか。

『ドストエフスキー 新資料と研究』に載った右の『時代』の論文には、ニコライ・ローゼンブリュームによる詳細な解説「一八六二年のペテルブルグの大火とドストエフスキー」が付されている。（同じローゼンブリュームだがもう一人、リヤ・ローゼンブリュームという優れたドストエフスキー研究者がいるから、要注意。リヤ・ローゼンブリュームも『文学遺産』シリーズでよい仕事をしている。夫妻か。）ニコライ・ローゼンブリュームはこのあたりの事情を詳しく調べて、どうやらチェルヌイシェフスキーは故意に事実をまげているようだとほめかしている（『ドストエフスキー 新資料と研究』38）。

言うまでもないが、ソ連時代においては、ベリンズスキー、チェルヌイシェフスキーの「革命的民主主義者」の系譜こそレーニンに連なる聖なる系譜であり、チェルヌイシェフスキーの回想は正しいとされてきた。しかし、「聖人」も事実をまげることがあっただろう。

チェルヌイシェフスキーの「会ったときのこと」とドストエフスキーの「個人的なこと」を比べてみると、チェルヌイシェフスキーはそれまで写真で見ただけというふうに書いており、ドストエフスキーは前から直接知っていたと書いている。またドストエフスキーは別の客が来たのですぐ辞去したと言い、チェルヌイシェフスキーは長居されて仕事の妨げに

なったが許してやったと言っている。小さな食い違いは他にもいくつかある。

こういう細かい相違も、おそらく、チエルヌイシエフスキーがこしらえたことだろう。

前にも言ったように、チエルヌイシエフスキーが一八六〇年代のロシアの知識青年たちに対してつよい感化力もっていたことは、どのロシア文学史にも書かれている。その当時の人の記録、たとえば農奴身分から出てペテルブルグ大学のロシア文学の教授となり、長く検閲官の仕事もしたニキチエンコの有名な『日記』にも、チエルヌイシエフスキーの「権威」ははっきりと書かれている。

「『ロシアのことは』〔若い評論家ピーサレフがこの雑誌に拠って過激な理想主義を掲げていた。青年たちは熱狂的にピーサレフを歓迎した〕は、『現代人』のあとに随いていっている。『現代人』が理想であり、手本なのだ。『ロシアのことは』にとって、『現代人』編集部の長であるチエルヌイシエフスキーは、ロシアのみならず全ヨーロッパで唯一最高の知能であるのだ。チエルヌイシエフスキーだけが、人類およびロシアが現在必要としているものを、いや未来において必要となるものまでも、すべて理解しており、かれだけが、真に社会的具体的な意味でそれらの必要を満たしてやる力を持っているのだ、ということになっている」(ニキチエンコ『日記』。ベルリーネル『チエルヌイシエフスキーとその文学上の敵』139の引用による。)

そして、一八七〇年代のナロードニキをはじめとするロシアの革命願望者たちにとってチエルヌイシエフスキーの『何をなすべきか』は「一種の福音書」であった(石川郁男「研究小史」。金子幸彦他編『チエルヌイシエフスキーの生涯と思想』319)。

ドストエフスキーが檄文「若きロシア」のピラを手にチエルヌイシエフスキーの家へ駆けつけて、どうか性急な青年たちを抑えてくれと頼んだのは、たしかに「憐れむべき病人の神経障害」がさせた行動であったかもしれない。しかし、見当はずれな頼みではなかった。当時の過激派青年たちがこの「カリスマ」批評家チエルヌイシエフスキーの指示に従うことは、だれもが知っていた。チエルヌイシエフスキー自身もわかっていたはずである。だから政府もこの火事のあと、ドストエフスキーの訪問の約一ヶ月後の一八六二年七月、「危険人物」チエルヌイシエフスキーを逮捕したのである。

言い添えておきたいことが二つある。

一つは、右に紹介したチエルヌイシエフスキーの回想「ドストエフスキーと会ったときのこと」が「病人」ドストエフスキーを実に生き生きと描き出しているということである。ニコライ・ローゼンブリユームが示唆するように、この回想記がウソを含んでいるとすれば(私は訪問の様子はウソではない、種はあったと思う)、それはドストエフスキーのことを思い出したときチエルヌイシエフスキーの想像力がたいへん活発に動いて「創作」をはじめたということである。

チエルヌイシエフスキーの小説『何をなすべきか』は、人物の性格が一色に固定されており、こどもがぬり絵に好きな色をぬっているように陰影にとぼしい。ところが、かれが思い出して描いた「病人」ドストエフスキーは、まるでドストエフスキーの小説のゴリヤートキンやポルズンコフのような生き生きとした依存型人物で、腰つきや口のきき方まで目に浮かんでくる。明らかにチエルヌイシエフスキーは、思ひ出の中のドストエフスキーによって刺激されている。会った人の想像を引きつけ刺激する強い誘引力（あくまで相手を無視して自分の想念を押しつけてくる尋常でない力）が、ドストエフスキーから発していたのではないだろうか。チエルヌイシエフスキーは「わたしは聞いているふりをしていた」と書いているけれど、無視されていたのがどちらだったかは明らかである。

前に紹介した批評家ストラホフは、雑誌『時代』の同人で、周囲の人たちから冷静沈着だと認められていた人物だが、そのストラホフでさえ、ドストエフスキーのことを思い出すと、無視された感じがよみがえってきて腹が立つらしい。そのため非常に生き生きとしたドストエフスキーのプロフィールを描いている（中村「友人ストラホフの『観察』」参照）。

もう一つは、拔群の外国語読解力を持ち、理性と啓蒙を信じていたといわれるチエルヌイシエフスキーこそ、ドストエフスキー以上に完璧な「夢想家」であり、観念に酔った「奇妙な人」ではないだろうか、ということである。チエルヌイシエフスキー

は、人間の性は善であるはずだという見解に立ち、「理性的エゴイズム」というスローガンを宗教のドグマのように信じて、そのドグマを実生活でも自発的に守って生き、流刑されてもその見方に変化を見せなかった。

金子幸彦の論文「チエルヌイシエフスキーの『生活と時代』に、チエルヌイシエフスキーをシベリアの流刑地カダヤから脱出させる計画があつて、そのため妻オリガがカダヤへ向かったという話が書かれている。しかしそこに金子は「現在はこのような計画のあつたことを否定する説もある。そのおもしろい論拠はオリガがその性格および能力の点で救出計画にふさわしくない女性であつたということである」と書き加えている（金子幸彦他編『チエルヌイシエフスキーの生涯と思想』25）。

どうということなのか。

調べてみると、チエルヌイシエフスキーの妻オリガ・ソクラトヴナは、美人の浪費家で、手のつけられないはずば女だったというのである。V・A・パイピナ『チエルヌイシエフスキーの人生の愛——家族の記録から』（一九二三年）は、親戚の者たちがいかにこの女に悩まされ続けたかを、かれらの手紙を引用して詳細に伝えている。著者パイピナはチエルヌイシエフスキーの母方の親戚でペテルブルグ大学教授だったアレクサンドル・パイピンの娘である。チエルヌイシエフスキーに味方しオリガを冷たい目で見ていた本だが、チエルヌイシエフスキーとオリガの手紙、二人の間の息子アレクサンドルの手紙なども

ふんだんに引用して、この夫婦の実像をある程度正確に伝えていると思われる。

チエルヌイシエフスキーが年に一万二〇〇〇から一万五〇〇〇ルーブリもの原稿料を得ていたころは（当時そんなに稼いでいた書き手は他にいなかったらう）、オリガは、夫がまったくの書齋人間で一緒にあそびにつきあってくれないので、ペテルブルグで自分用の馬車をもち、毎日シヨッピング、オペラと遊び暮らして、若い男たちを相手にしていた。夫が逮捕され流刑になってからも、夫の著作がもたらす収入で、あちこちに移り住みながら遊んで暮らした。

チエルヌイシエフスキーを「書齋の革命家」とする見方は「ブルジョア自由主義的解釈」であるとチエルヌイシエフスキー研究者石川郁男は書いているが（前掲書³²⁴）、かれが書齋人であったことは解釈以前の事実であり、それこそかれの能力だった。チエルヌイシエフスキーは、逮捕されてからも、ベストセラー小説『何をなすべきか』を書いて莫大な収入をもたらした。流刑になってからも勤勉に翻訳を出し続けた。かれは生涯妻オリガのために働き続けた。アレクサンドル・パイピンが出版と経理関係の仕事を引きうけ、やがてその仕事をチエルヌイシエフスキーの息子アレクサンドルが引き継いだ。

ドストエフスキーは短編『わに』（一八六五年）で、流刑の憂き目にあつたチエルヌイシエフスキーを揶揄しているが、そこには妻オリガが派手でおつむの弱い尻軽女であることも暗示さ

れている。

とても流刑地脱走計画を相談できるような女性ではない。ところがチエルヌイシエフスキー本人は、周囲のだれもがひどい女だというオリガに、一生涯、随喜の涙を流して仕え続けた。相手が若いつばめをこしらえても非難することもなかったし、自分から別れることなど考えられなかった。「彼は個人的道徳性において最善のロシア人の一人であつたばかりでなく、聖人に近い人であつた」とベルチャーエフは書いているそうだが（前掲の大竹「チエルヌイシエフスキーとミハイロフ」両者の女性観¹¹⁶）、そういう解釈も可能かもしれない。しかし、「聖人」の妻が聖女とは限らない。

ドストエフスキーの小説を読んできた者の目には、このチエルヌイシエフスキーの姿は、ドストエフスキーの『永遠の亭主』の主人公、美しい強い男女の関係に仲間入りすることにあこがれ、男関係の絶えない妻に仕えることを心から願う「万年寝取られ亭主」トルソツキーと重なり合うように見える。

金子幸彦の論文「生活と時代」には、チエルヌイシエフスキーがオリガ（サラートフの医者娘だった）と結婚する前につけていた日記が紹介されている。かれは『現在私の幸福を構成する者と私の関係についての日記』（一）という題をつけた「一冊の分厚い大型の本を形づくるほどに長い日記」をつけていたというのである。その日記の「オリガ・ソクラートヴナはなぜ私の妻にならなければならぬか」という題の節には、「彼女

の美貌、高い知性、性格の果敢と思考の自主性、卑俗性の欠如」が書かれている。「私はなぜ花嫁をもたなければならぬか」という節には、「自分は妻を不幸にする権利をもっていない」と考えてはじめて、自分の行動と思考を抑えることができるから、と書かれている。

チエルヌイシエフスキーは、オリガとの結婚生活を空想しつつ彼女に別の恋人ができた場合を想定して、こう書いている。

「もし彼女の生活のなかに新しい情熱が現われたらどうなるか、もちろん彼女は私から去るだろう。しかし彼女の情熱の対象がりっぱな人間であるなら、私はうれしい。このことは私にとって悲しみであって屈辱ではない」(17)

サラトフでは「新しい情熱」は現われなかった。チエルヌイシエフスキーはオリガと結婚し、妻を連れてサラトフからペテルブルグへ出た。それから学校教師を経て雑誌の書評欄で活躍し、やがて『現代人』誌の主幹として迎えられて社会評論に筆をふるう。収入は激増した。その金をつかって妻があそぶことを、チエルヌイシエフスキーは喜んでいたようである。自分を捨てないのならありがたいという気持だったのかどうか、そこまではわからない。しかし、チエルヌイシエフスキーは「ほくにとって妻は、本当に大切な人なのです。こどもたちよりはるかに大切なのです」と最後の最後まで手紙に書いている。愚かな妻だろうと賢い妻だろうと、かれとしてはまったく違いはなかったのではないか。チエルヌイシエフスキーこそ、病跡学

的研究 (pathography) の対象となるべき人間ではないだろうかとさえ思われてくる。

しかし、ドストエフスキーと違ってチエルヌイシエフスキーは、自分の「病」を観察する力はなかった。チエルヌイシエフスキーには『永遠の亭主』を書く才能はなかった。

★注 私のこのドストエフスキー理解は、いまでは多くの人たちに受け入れられているようである。

私は『ドストエフスキー・生と死の感覚』(岩波書店、一九八四年)で、ドストエフスキーのとりあげる人間が病的畸形の一族であることを書いた。この『ドストエフスキー・生と死の感覚』のロシア訳(ペテルブルグ、ブラーニン社、一九九七年)は、ロシアをはじめ各国のドストエフスキー研究者から歓迎された。その後ロシアで出た『ドストエフスキー百科事典』(Н. Населкин, Достоевский Энциклопедия. 2003.)でも、アメリカで出た『ドストエフスキー百科事典』(K. Lantz, *The Dostoevsky Encyclopedia*. 2004.)でも『ドストエフスキー・生と死の感覚』は必読文献として取り上げられている。